発信！高校生記者 2019年度 特大号 Vol.4

えひめ愛顔（えがお）スポーツ

東京オリンピック・パラリンピックを盛り上げようと、県内の小中高校などでは「オリンピック・パラリンピック教育」が進んでいる。オリンピアンの講演や競技体験など各校でさまざまなメニューが工夫され、両大会への期待が膨らむ。4高校の活動の様子を高校生記者がリポートする。

音を頼りに悪戦苦闘

東温高 ゴールボール実技体験

東温高校スポーツ健康類型の1、2年生六人は1月21日と24日、東京パラリンピック正式競技の「ゴールボール」の実技体験を行った。生徒らは音を頼りのプレーに悪戦苦闘しながらも、チーム一体の力を発揮し、盛り上がった。

ゴールボールは、視覚障がい者が男女別に行うチームスポーツ。1チーム3人ずつで対戦。全員目隠しし、見えない状態で鈴の入ったボールを投げ合い、得点を競う。ボールの転がる音や相手の気配、床面の振動や感触など視覚以外のすべての感覚を研ぎ澄ましての競技だ。

生徒らはルールを事前学習し、初めて挑戦した。上手に得点を決めると、歓声が上がる。逆に、ボールが体に当たっても、ボールが触れるまで、床に伏せるなど、ボールの動きを予測しての防御も求められた。

ボールの音と鈴音の聞き分けが難しかったバスケットボール部なので、覚えるのが難しかったという。この経験を生かし、ボールの方向を把握するのが難しく、ボールの方向を聞き分けるのに苦労した。

最初は緊張があったが、でも、しっかり耳を澄ませて集中できた楽しくプレーした。ゴールボールを知らない人にぜひ、ルールだけでなく、チームワークなど競技の大切さを伝えたい。

同校で行った、生徒らは音を頼りのプレーに悪戦苦闘しながらも、チーム一体の力を発揮し、盛り上がった。

ゴールボールは、視覚障がい者が男女別に行うチームスポーツ。1チーム3人ずつで対戦。全員目隠しし、見えない状態で鈴の入ったボールを投げ合い、得点を競う。ボールの転がる音や相手の気配、床面の振動や感触など視覚以外のすべての感覚を研ぎ澄ましての競技だ。

生徒らはルールを事前学習し、初めて挑戦した。上手に得点を決めると、歓声が上がる。逆に、ボールが体に当たっても、ボールが触れるまで、床に伏せるなど、ボールの動きを予測しての防御も求められた。

ボールの音と鈴音の聞き分けが難しかったバスケットボール部なので、覚えるのが難しかったという。この経験を生かし、ボールの方向を把握するのが難しく、ボールの方向を聞き分けるのに苦労した。

最初は緊張があったが、でも、しっかり耳を澄ませて集中できた楽しくプレーした。ゴールボールを知らない人にぜひ、ルールだけでなく、チームワークなど競技の大切さを伝えたい。

（石田心美、在間真行、新田翔大、吉岡遥翔）

目隠しをして音を頼りにゴールを守る生徒（撮影・新田翔大）

2年 武田麗央さん（17）

今回の競技は初めてで、目を隠してスポーツをするというすごく楽しかった。普段やっている野球にパラリンピックは面白いということを知って欲しい。

2年 藤田大瑶さん（17）

上り数倍の集中力が必要だ。いろいろな人にパラリンピックは面白いということをぜひ知って欲しい。

音を頼りに、耳で聞いてプレーするスポーツは初めて。自分の位置の認識や守りの動きなどが難しかったけれど、とても楽しかった。また、やりたい、親にも話したい。もっと多くの人にこの競技を知って欲しい。

1年 和田茜里さん（16）

触れてもらいたい。ルールだけでなく、チームワークなど競技の大切さを伝えたい。

1年 渡部碧さん（16）

だけでなく、聴覚を使うことで上達するのではないかと思った。この経験を生かしたい。

一流選手と模擬レース

大洲高 カヌー代表候補ら講演

0.3%の差 勝敗決す

講師に輪島選手、多田羅選手の3人は、こぎ手の能力を測定する機器設置エルゴメーターを使い、壇上で本校の教人の生徒と模擬レースを行った。

エルゴメーターのパドルをこぐとスクリーンに映ったボートが進む仕組み。距離100㍍のコースで一対一の勝負。

生徒の力はレース終えただけで「しんどい」「つらい」と肩を上下させる。逆に、輪島選手は平然と上腕を脱ぎ、ウンケアー姿になったが松浦さんの敗れた。

小松選手と勝負したカヌー部主将の藤田実さん（17）は、二度挑戦し、一度目は「緊張してうまくこぎ切れなかった」と悔しがった。

藤田選手は、「オリンピックを機に、世界レベルの選手と一緒に打ち込むことが楽しい」と話した。

エルゴメーターで大洲高生と勝負する多田羅選手（撮影・米澤英揮）

大洲高生に向けて勝利へのプロセスを熱く語る尾野藤直樹さん（撮影・米澤英揮）

大洲高校で昨年1月11日、オリンピック・教育講演会が行われた。日本オリンピック委員会のタ尾野藤直樹さん（41）は「ベストコンディション分の「レベル」の厳しい世界を語る。

その厳しさと対峙（たいじ）する松浦選手は夢をたって、ひかりを、数を使い、細部に意識してやるようにし、夢を目標へと変えるとうだ。多田羅選手は、人間力を大切にし、「オリンピックを機に、世界レベルの選手と切にして打ち込むことが楽しい」と話した。

「ベストコンディションから0・3%の差」とは、例えば100㍍を10秒00のベストタイムで走れる選手が、本番で10秒03しか出せなければ勝てない」という意味。「世界一の準備をした選手が勝つ」と尾野藤さんは「千分の一レベル」の厳しさ、明内容で力を発揮できるかどうか」で勝敗がかかれる」と話す。

講演会は県教育委員会のほか、県競技力向上対策本部所属スポーツ専門員でカヌースプリント日本代表候補の小松正治選手（38）、多田羅英生選手（27）が後援し、「オリンピックを機に、世界レベルの選手と人とのつながりを大切にして打ち込むことが楽しい」と話した。高校3年の多田羅選手は、「自分の大きな目標を持ってチームで入賞してみせる」と強い決意を表した。（中島夏野子）

沿道の声援 感激の涙

八幡浜工業高 元聖火ランナー・小川栄弐さん（八幡浜工高出）講演

昨年11月9日、八幡浜工業高で恒例の「工業祭」があった。約2・10人の全校生徒や地域住民らでにぎわい、パラリンピックスポーツ体験会や元聖火ランナーの講演会も行われた。

同校1期の卒業生で陸上部主将の小川栄弐さん（73）＝奈良県生駒市在住＝が「高校時代の思い出と会社生活から得たもの」の演題で講演。「多くの人と知り合い、見聞や経験は人生の大きな財産。よい人間関係を築いてほしい」と後輩を激励した。

小川さんは高校3年だった1964年、東京五輪の聖火ランナーの正走者に選出され、上尾市区の39区・2㌔を駆け抜けた。

「トーチの火を消さないように、走り終わって初めて沿道のへのぎりに気づき、感激の涙が出た」と当時の感激を語った。

高校時代、優秀の大会で転倒し失格になった苦い思い出や大学卒業電メーカーでの過酷な海外営業の経験も紹介し、挑戦する意欲の大切さを強調した。

講演を聞いた2年矢野航大さん（17）は「大先輩のさまざまな経験はとてもためになった」とうなずき、同級本華人さん（16）は「小川さんのような前向きの多くの人生を送りたい」と感銘を受けていた。（宇都宮優心）

1964年の東京五輪聖火リレーで使ったトーチを手にする小川栄弐さん（撮影・松本憲行）

大逆転 ボッチャに夢中

パラスポーツ体験でボッチャに熱中する小学生（撮影・松本憲行）

パラスポーツ体験は、障害があっても楽しめることを知るために企画。ボッチャという競技の用具が用意され、実戦を通じて魅力を実感した。

ボッチャは1対1の個人戦。ジャックボールという白球をコートに投げ、それぞれが持つ赤と青のボール6個を近づけたプレーヤーが勝利する。

会場には同校の生徒や小学生が訪れ、ゲームに挑戦した。最後の投球で逆転できるのか？緊張感が漂う。

「ボッチャ面白い！」と目を輝かせた1年生の2人。「やったー！」と歓声を上げた。

参加生徒らはパスの練習を行い、体全体でボールに向かうことを心がけて欲しいと訴えた。

（松本愛愛、今井沙羅）

可能性信じて挑戦を

新居浜東高 オリンピアン・佐伯美香さん（松山出身）講演

3度のオリンピック経験を振り返る佐伯美香さん（撮影・柳川茶太郎）

バレーボールの2種目で計3回のオリンピックに出場した松山市出身の佐伯美香さん（38）が昨年12月11日、新居浜東高校で健康スポーツコースの2、3年生約60人を対象に、夢をあきらめない、をテーマに講演した。厳しいスランプを乗り越えた思考や忍耐、チームプラス思考で忍耐・忍耐を技人生を語り、自分の可能性を信じて挑戦することが大切だと呼びかけた。

佐伯さんは1996年アトランタ五輪に八強バレーボールで出場、その後ビーチバレーに転向し、2000年シドニー五輪で4位入賞を果たした。08年の北京五輪も出場し、現在は松山市の松山東雲女子大学・短期大学バレーボール部でスランプに陥った経験があるので、佐伯さんの言葉が胸に響いた。これからの生活に生かしていきたいと思う。

実技体験を通じてスランプに陥った経験があるので、佐伯さんのようにオリンピックに行くための苦労や努力を聞き、佐伯さんのように目標を持つ強い気持ちで、色々なことに取り組んでいきたいと思った。

実技体験を使ってみんなで楽しくできた。二人組でのスパイク、最後は佐伯さんとスパイクを打ってもらいました。

中学3年の終わりから佐伯さんの指導を受けている。一つ一つのプレーに対し的確なアドバイスをもらえ、制限になっている。講演では、目標を持つこと、それに向かって練習することの大切さを学んだ。

一部とビーチバレーボール部のコーチを務めている。

講演では、現代を離れ京都の名門校に進んだ高校時代を振り返り、技術を高める心構えを語った。

バレーボール部でスランプに陥った経験があるので、佐伯さんのようにオリンピックに行くための苦労や努力を聞き、佐伯さんのように目標を持つ強い気持ちで、色々なことに取り組んでいきたいと思った。

実技体験を通じてスランプに陥った経験があるので、佐伯さんのようにオリンピックに行くための苦労や努力を聞き、佐伯さんのように目標を持つ強い気持ちで、色々なことに取り組んでいきたいと思った。

3年 森川太陽さん（18）

3年 矢原星恋さん（18）

2年 鷹田颯馬さん（17）

2年 古河聖愛さん（17）

発信！高校生記者

もっと！新聞キャンペーン

愛媛新聞社が展開する「もっと！新聞」キャンペーンの一環で愛媛県内の連携企画「講師・記者体験」を各高校に派遣し高校生記者を育成し、新聞ONLINEで公開中。

目線

東温高 報道部

静寂の中で競技をする選手たちに集中力の大切さを感じた。機会があれば自分もやってみたいと思った。ゴールボール選手のパラリンピックでの活躍を心から応援したい。（T）

大洲高 写真部

「0・3%の差」を出し切ることが、それは困難で重要さのか、そして選手たちが多くの厳しさ、多くの努力をしているのかを感じた。私たちも自己の努力をぶつけていきたい。（米）

八幡浜工高 広報委員

政を通じ、半年を切ったオリンピック・パラリンピックへの期待が一層高まった。特にパラスポーツについては、いろいろな競技があることを知り、より詳しく調べてみたいと思った。（M）

新居浜東高 放送部

本校に佐伯さんの指導を受けていた生徒がいることを知り驚いた。現役時代のスランプをスランプの対処方法など、今後の体験やスランプの対処方法などを聞くことができ、貴重な体験だった。（I）

(C) 愛媛新聞社　無断転載、複製及び頒布は禁止します。